

平成30年度スーパーバイザーによる学校教育支援事業報告書

研究テーマ「『深い学び』をデザインするカリキュラム・マネジメントの充実」

鳥取市立福部未来学園

スーパーバイザー：國學院大學 田村 学 教授

1 はじめに

福部未来学園は、幼稚園児から9年生まで総数226名の子どもたちが通う幼稚園・義務教育学校10年一貫校である。学園周辺には、鳥取砂丘や日本有数の生産量を誇る地域特産のらっきょう畑が広がり、豊かな自然に囲まれている。地域住民や保護者の教育に対する関心は高く、以前から0～15歳のスパンで子どもたちの育ちを考えようとする風潮がある。開校前に鳥取市校区審議室へ提出された要望書からも「福部の特色や人材を生かした教育で学力の向上を図りたい。」「理数・外国語教育を充実させ、未来を拓く力を身に付けさせたい。」「ふるさと福部を大切に思う、心優しく逞しい子どもに育てほしい。」という強い願いが感じ取れる。これらの思いを受け、平成29年度までは施設分離型一貫校として、幼小中の接続を意識したカリキュラムづくりを行ってきた。そして新たに施設一体型の幼稚園・義務教育学校としてスタートした本年度、10年間の「深い学び」を実現していくため「カリキュラム・マネジメント」の充実と「アクティブ・ラーニング」の視点による授業改善が必要になると考え、研究を進めていくこととした。

2 研究のねらい

- 10年間のつながりを意識したカリキュラムを作成することで、「深い学び」の実現を図る。
- 「アクティブ・ラーニング」を意識した授業改善を行うことで、学力向上を図る。

3 研究内容

(1) 深い学びを生み出す『福部未来学園カリキュラム』の作成

①小中一貫カリキュラム（H28～29）の概要と課題

校名にも記された『未来』を拓く力を育成する教科として『みらい科』を新設。英語・ICT活用を中心とした『国際コミュニケーション』と、礼儀・礼節・奉仕の心を育む「人間力」の2領域で構成。生活科・総合的な学習で、福部の豊かな『財（人・自然・産業・文化等）』を生かした『ふるさと（地域）学習』を展開。幼小接続におけるアプローチ・スタートカリキュラムを統合し、交流・合同学習の年間計画等、初等ブロック3年間のカリキュラムを編成した。

しかし、新設した『みらい科』において、教科としての一体感がなく評価が難しい等の問題点が生じてきた。また、「5・6年で外国語が教科化、3・4年で外国語活動が先行実施された今、『みらい科』の国際コミュニケーションの特色をどう出すか。」「『みらい科』の中の人間力では、茶道や華道、座禅をはじめとする日本文化、マナー講座等を主に展開しているが、それが本当に『子どもたちの未来に生きる力』の中心を担えるか。」等、課題も出てきた。

②本年度のカリキュラムデザインとマネジメント

平成29年度カリキュラム評価をもとに、次の2点について改善を行いたいと考えた。

- 「深い学び」が様々な知識や技能、自分の生活や体験をつなぎ、理解をより深めていくことだとすると、つなぐプロセスで重要になる『思考力』の育成は欠かせないものとなる。思考力育成を中心としたカリキュラムマネジメントができないか。
- 子どもたちにつけたい『思考力』を明確にすると共に、『いつ』『どのように』積み上げていくか。偶発的ではなく、体系的に習得していくことができるようにしたい。

このようにして作成したのが図1に示したカリキュラムデザインである。本校の特色である『みらい科』と『ふるさと学習（総合・生活）』を全体の核に位置づけ、その相互作用で思考力・コミュニケーション力・主体性等を育成したいと考えた。実践を進める中、10月には田村学先生に1回目のアドバイスをいただき、更なる改善への手がかりを得た。それが以下の2点である。

○外国語・英語を「みらい科」から独立させ、一つの教科として10年一貫のカリキュラムの中で実施していくとともに、福部の強みや特色を出していく。

○インプットするだけでなく、アウトプットすることで知識は身についていく。また、各教科の知識・技能を活用すると知識が関連づき、深い学びとなる。インプットすると同時に言語でアウトプットする場をもっと取り入れる。

その後協議を重ね、1月に完成したのが図2の新カリキュラムデザイン案である。幼稚園～9年の外国語活動・外国語を一つの柱として『みらい科』から独立させる。そして、幼稚園の活動～1・2年の生活科、3～9年の総合的な学習（ふるさと学習を主とした内容）の中で、思考スキル・ツールを活用する『未来創造思考力』を核とした探究活動を行う。これを、10年間を貫く「新みらい科」としてカリキュラムの中心に置き、他教科・領域等と連動させて汎用的能力育成を図りたいと考えた。また、子どもたちの実態・社会に開かれた教育課程という観点からも、カリキュラムが学校内に留まることなく家庭・地域を巻き込んだものにしていくことは必須である。これらの要素から構成したカリキュラムの試案を、鳥取市教育委員会・他義務教育学校と協議を重ねながら完成に近づけ、平成32年度に完全実施したいと考えている。

図1 平成30年度 福部未来学園カリキュラムデザイン

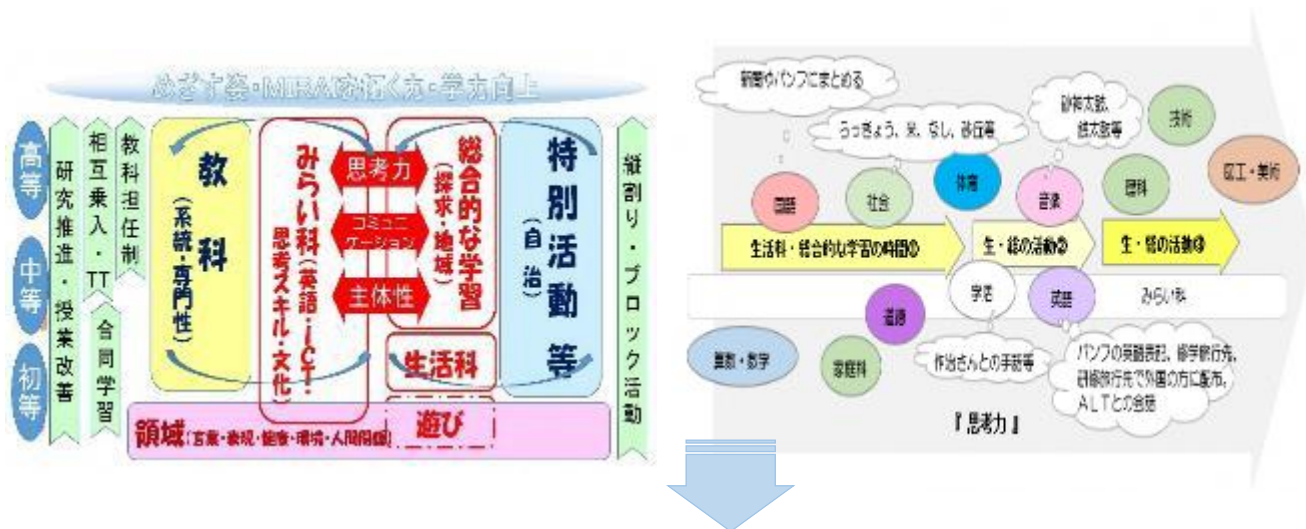
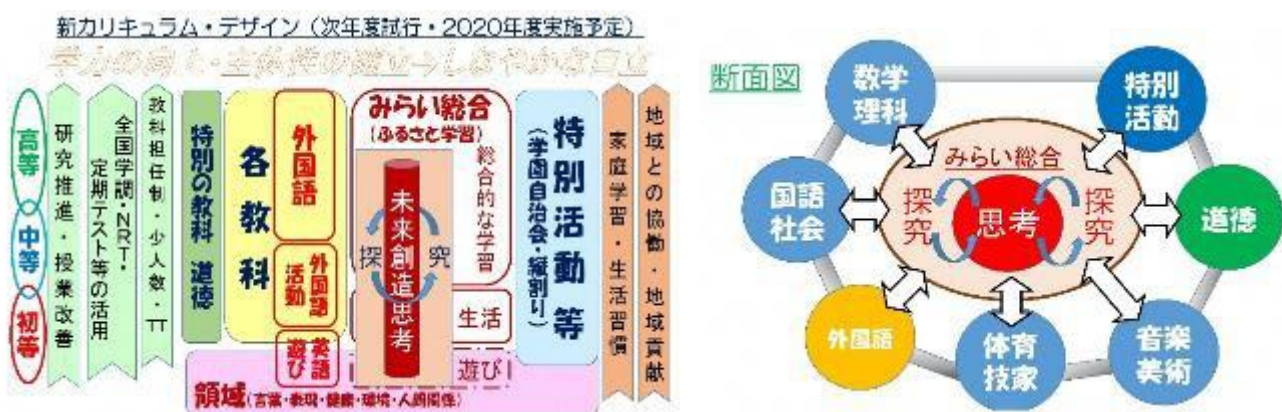
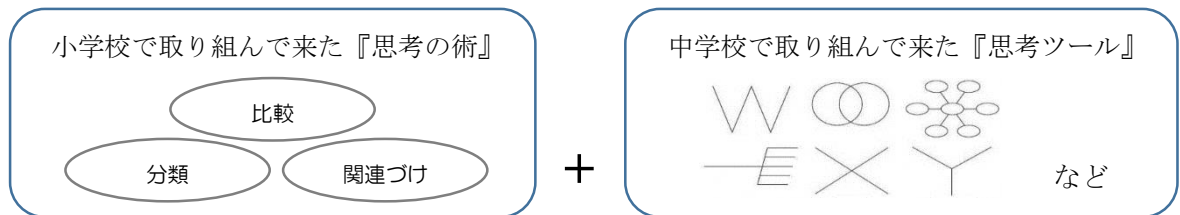


図2 次期 福部未来学園カリキュラムデザイン (案)



また、深い学びを生み出す『思考力』について、下図のように平成 29 年度まで小学校では全教科で『思考の術』を意識した授業づくり、中学校では総合的な学習を中心に『思考ツール』の活用に取り組んできた。それらを基に、学園として子どもたちにつけたい思考力を絞るとともに、その育成に向けてカリキュラムのどこに位置づけるのかを検討した。



まず、どの教科にも汎用的に使われる思考力に絞って取組を始めることとし、それを『未来創造的思考力』と命名した。ポイントは次の4つである。

- 実社会、実生活に活用できる
- 各教科等に生きて働く
- 論理的（垂直思考）に考える
- 創造的（推定思考）に考える

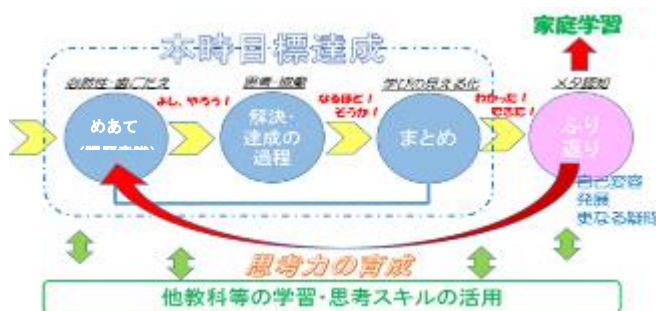
そして、10年間の『思考』のゴールの姿を描きながら、幼稚園時期から育む思考力を明示的・自覚的に育てていく時間を作りたいと考えた。基本となる思考スキルを下表の4つに絞り、それぞれが初等→中等→高等と、より多様で高度なものへと発展・深化していくスパイラル構造をイメージしている。（右図参照）

比較する	対象の相違点、共通展を見つける
分類する	特徴をもとにまとまりに分ける
関連づける	学習事項同士や学習事項と自分の経験をつなげる
多面的に捉える	多様な視点で対象を捉える



(2) 思考力を育む授業づくり

①全ブロックで取り組む授業の共通理解



授業づくりについて、【めあての設定（課題意識を明確にする）⇒自力・集団解決⇒まとめ⇒振り返り】の流れを確認し、共通理解のもと1～9学年全てのクラスで実践を行う。学習時間の中でどのような思考を働かせたいかを明確にし、資料や活動内容を仕組むようにする。また、自力解決の段階で根拠を明確にしながらか自分の考えを書いたり、授業の終わりに「振り返り」を書いて、思考を整理したりし、自己の内面や成長をメタ認知することで、次の学びへの意欲につなげるようにした。

振り返りの姿①	学習したことを自分なりにまとめている。
振り返りの姿②	既習の知識や生活に関連させてまとめている。
振り返りの姿③	自分の考えが深まったり、広がったりして自己変容している。

②保育・授業実践

高等ブロック

(9年生:技術分野 『情報に関する技術D(3)プログラムによる計測・制御』)



意図したプログラムを組むにはどうしたらよいか、生徒に手順や方法を整理して考えさせるために思考ツール(フローチャート)を用いて実践。「ワークシート上にチャート図を描く」⇒「実際に入力してみる」を繰り返し行い、試行錯誤しながら意図する動きに近づけていった。うまく動かない場合、どの部分が機能していないのか、生徒同士で自然と対話する姿が見られた。⇒これまでに学んだ動きの図式化と結び付けて考えたり、友達と自分のチャート図を比較したりする思考の姿が見られた。

初等ブロック

(幼稚園さくら組:『お店屋さんごっこをしよう～お店屋さんごっこの準備をしよう～』)

指導助言:島根大学 肥後功一教授



子どもたちのこれまでの様子や活動の内容が捉えやすいように、従来とは異なる形で指導案を作成した。園児がどんな発想をするか、どんな試行錯誤する姿が見られるかを指導案に記入してもらい、その姿を検証軸として、研究協議を行った。



幼稚園教育の「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」の中にも「思考力の芽生え」がある。10年間のゴールの姿だけでなく入口の姿を捉えることで、各学年でどのようにその力をつけていかなければならないかを一人一人の教員が自覚できるようにした。ここでは、試行錯誤を生み出すための環境設定の大切さ「環境構成のひき算」を保育から学ぶことができた。様々なものが豊かにあることが必ずしも子どもの思考力を生み出すとは限らない。多少の不自由があって初めて「何とかできないか」と考えることができる。また、子どもたちにどのような力がついたのか10年間追って捉えることができるのも本校の良さである。幼稚園で培った「個々」の力を10年間丸ごと捉え、伸ばしていくことのできる体制づくりも今後の課題と感じた。

初等ブロック

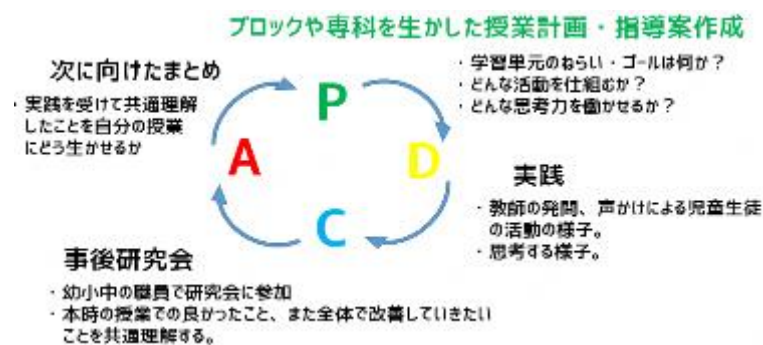
(1年生:『冬と仲よし ～風と一緒に遊ぼう～』)

指導助言: 國學院大學 田村学教授



風と遊ぶ中でその不思議さや面白さを子どもたちは感じ取り、何が楽しかったのか、なぜ楽しかったのか、友達のおもちゃと比較したり、風との関連を考えたりしながら話し合っていた。子どもたちに思考力がついてきていると感じたが、子どもたちに身につけている(自分で引き出して使いこなす)スキルが分かるほど体系的なカリキュラムまで落とし込めていないので、今後10年間のカリキュラムの中に明示化していく必要がある。

③授業研究会の進め方



研究授業後は、幼小中全ての教員が参加して事後研究会を行った。グループ毎の話合いの中で出てきた課題点や改善点を次の授業に生かすことができるよう研究通信としても発信し、共通理解して各自の実践につなげることができるようにした。PDCA サイクルを生かして授業研究会を行うことで、目指す授業像を明らかにできつつある。また、幼小中全ての教員が話合いに参加することで、子どもたちの姿を多角的に捉えられるようになり、教員側の子どもの捉え方も豊かになってきたと感じている。

4 田村先生からの指導助言

① 福部未来学園カリキュラムづくりについて

カリキュラムづくりの考え方やねらう方向性は良いが、基本となる学習指導要領を外さないようにすることが大切。思考や探求を中心軸に、体系的な義務教育学校のカリキュラムができると良い。

② 授業づくりについて

研究授業で見られていた子どもたちの「思考を深める姿」を9年生まで大切に育てていくという共通理解をもち続けたい。誰が授業をしても、子どもの目指す姿を実現しようとしていることを担保するのがカリキュラム・マネジメント。その子どもの姿を全員で確認できたのが良かった。

5 おわりに

福部未来学園が大切にしたい「未来を拓く力」を具体的に想定し、その実現のためにカリキュラムマネジメントを行うことが大切であると改めて感じた。